

田能村竹田筆《煙霞帖》について —その青年期画業における位置づけ—

宗像 晋作 (出光美術館)

文化8年(1811)4月、竹田35才時に制作された《煙霞帖》(京都国立博物館、重要美術品、縦17.4×横9.8 糎)は、多くの画帖作品を遺す竹田の画業において、現存作中、最初期の画帖である。山水や花卉を丁寧な筆致で描き、様々な内容の詩句を書き、画業初期の画帖としては豊富な内容をもつが、今まで詳細に検討されることがなかった。従って本発表では、竹田青年期の作画のあり方を伝える本画帖の意義を明らかにし、これを竹田の画業上に正當に位置づけることを目的とする。

まず、制作経緯を整理する。浦上玉堂による同題作《煙霞帖》(梅澤記念館)と、玉堂が依拠した清の李珣筆《腕底煙霞帖》(池大雅旧蔵、文化3年玉堂入手)が関連の先行作として知られる。高度な技巧に裏打ちされた李珣原本に比べ、玉堂は技巧的であることを意図せず、李珣とは異質の独自の山水を描いている。玉堂筆《煙霞帖》には、「辛未三月」(文化8年3月)の年紀を伴う竹田の跋があり、竹田筆《煙霞帖》はこの跋を記した翌月に制作された。

以上を踏まえ、竹田筆《煙霞帖》の内容について考察を進める。まず材質の特徴として、紙本が採用され、墨や色彩が光沢ある紙地に映え、しっとりとした艶やかな画趣を生んでいる。こうした材質的効果を作画に応用するのは、“烘染皴擦”と竹田が評した玉堂の作画のあり方に触発されたものと考えられる。

次に画の内容を見ると、山水図では、点苔や皴を丁寧に施す繊細な筆致が特徴であり、一見して李珣様式に学んだ様子が窺える。これは点苔や樹葉にたつぷりと水墨を塗抹する文化期に主流とした大胆な画法とは異なる。一方、構図やモチーフ形態は、李珣画を踏襲する趣は強く感じられず、むしろ竹田の創意が重視されている。

また、本画帖に花卉図が含まれることは、山水図のみで構成される先行画帖とは明らかに異なる方向性を示す。花卉図は画業初期の竹田が得意としたものだが、詩との関連に着目すると、花の擬人化のレトリックが詩画を密接に関連づけている。例えば第4図「秋海棠図」は、本画帖の花卉図の白眉といえる艶やかな風情を醸しており、玄宗と楊貴妃を連想させる詩が賦され、花と佳人(美人)を関連付ける艶情な画趣が志向されている。こうした作画傾向は、文化期の他の花卉図にも顕著であり、若き竹田の文芸的嗜好とも軸を一にする。また他の詩句には、竹田が同時期に自著で表明した文芸に対する独自の見識・嗜好に関する内容を含むものがあり、竹田の性情を窺い知るメッセージが含意されている。

以上のような考察を通し、玉堂の作画のあり方を理解する竹田が、本画帖において、先行作の単なる模倣を企てず、むしろ自己の性情に適った耽美的な画趣を、玉堂や李珣の半分程の大きさしかない小画帖に零れんばかりに表現していることを指摘し、竹田の文芸的嗜好や文人的資質が一つの結実をみせた青年期の重要作として本画帖を位置づける。